

2020 年度活動報告

本プロジェクトは、次の二つのアーカイブ活動の総称である。一つは、名画の中の人物や著名人に扮する作品で知られる森村泰昌(1951-)の文献資料を対象とする「森村泰昌アーカイブ」(2000年5月～)であり、もう一つは仏教美術、京都の文化、また美術作家の作品や展覧会の記録など幅広く撮影し続けた写真家の井上隆雄(1940-2016)の写真資料を扱う「井上隆雄写真資料に基づいたアーカイブの実践研究」(2017年4月～)となる。

今年度「森村泰昌アーカイブ」では、データベースの改良と公開用サイト作成を行った。合わせて資料の活用につとめ、また不足資料の拡充や追加訂正作業も継続中である。

「井上隆雄写真資料に基づいたアーカイブの実践研究」は、昨年度に続き、本学の正垣雅子（美術学部准教授、日本画模写）、加須屋誠（芸術資源研究センター・客員研究員、仏教美術史）との共同研究である、井上隆雄が残したインド・ラダック仏教壁画資料のグラフィック的観点からのアーカイブ構築を進めた。継続的に、ラダックにある15の寺院別にポジフィルムのデジタル化を進め、とりわけ井上隆雄が選定した重要なブローニーについては全てのデータ化を完了した。昨年度に注目したアルチチョスコル寺院三層堂の「般若波羅蜜仏母」については、デジタルデータを活用し、今年度は具体的な描写や筆致について考察するため模写制作を行った。またポジフィルムの寺院別の分類が完了したことで、共同研究者の正垣雅子が過去に調査を行なっているアルチチョスコル寺院とサスポール石窟廃寺をまずは対象とし、壁画のデータベース構築を行った。撮影された壁画が、どの堂宇に、どの方角に位置していたかという情報は重要であるため、データベースのためのIDは、空間配置の情報、すなわち東西南北と階層、そして壁に対する図像の高低を判明する範囲で付与することとした。この方法論は、これらの写真資料が写真家・井上隆雄の現地での眼差し、すなわち仏教図像調査のための撮影であるというよりも、むしろ図像を含む神秘的な寺院空間全体に対する関心によって生み出されたものであるという、この資料の特性に基づいて構築されたことを特徴として挙げておきたい。ここにアーカイブ構築における客観性と創造性という二律背反的な性質について考察し得る要点があるだろう。これらの研究成果については、第42回文化財保存修復学会にて研究発表を行った（2020年6月20、21日に熊本城ホールで開催予定であったが、新型コロナウイルス感染症拡大に伴い中止となった。代案として要旨集が作成、配布された）。一方で、井上隆雄資料全体としては、資料室としていた元・崇仁小学校が取り壊しとなったため、京都市内の元・淳風小学校へ移送した。

この二つのアーカイブ活動は、今後も管理・保管している実資料を対象に、データベース構築という実践的活動を通して、美術関連資料からの美術・文化史研究への方法論をより多面的に検討していく。